

Lower Bounds For The Distributions Of
Certain Multivariate Test Statistics

神大 養 藤越康祝
阪大 基工 磯貝恭史

§1. 序. 確率行列 A, B は互に独立で, それぞれ,
Wishart 分布 $W_p(p, \Sigma; \Omega)$, $W_p(n, \Sigma)$ に従い, AB^{-1}
の固有根を $d_1 \geq \dots \geq d_p$ とおく. Sawr [5] は, $\text{rank}(\Omega)$
 $\equiv p = p - 1$ のとき,

$$(1.1) \quad P\left(\log \prod_{j=1}^p (1+d_j) \leq x\right) \leq P\left(\log \prod_{j=1}^p (1+d_{R+j}) \leq x\right)$$

を示している. ここに, $d_1 \geq \dots \geq d_p$ は UV^{-1} の固有
根で, U, V は互に独立に $W_p(p, I_p)$, $W_p(n, I_p)$
に従う Wishart 行列である. (1.1) は回帰係数の次元に関
する尤度比 (= LR) 統計量の仮説のもとでの分布に対する一
つの下界を与えている. この尤度比統計量自身の分布は極めて
複雑であるが, 下界の分布はかなりくわしく調べられており,
(1.1) は棄却域を定める際に有効である.

この報告では, 任意の単調増加関数 $\phi(d_{R+1}, \dots, d_p)$ に対

しても, (1.1)型の Bound が求まることを示し, その特別な場合として, (1.1), および, Hotelling's T_0^2 type 統計量, Pillai's V type 統計量 に対する Bounds が求まることを注意する. さらに, Tintner's model における固有根, および, 正準相関係数に関する類似の Bounds を導出し, 統計量への応用を示す.

§2. 固有根に関する Bounds. 次の Lemma 1 は Poincaré Separation Theorem としてよく知られている (c.f. Bellman [1], p.118).

Lemma 1. p 次の対称行列 A と, $HH' = I_n$ なる任意の $n \times p$ 行列 H に対して,

$$(2.1) \quad \lambda_j(A) \geq \lambda_j(HAH') \geq \lambda_{k+j}(A), \quad j=1, \dots, n$$

が成立する. ここに, $\lambda_1(A) \geq \dots \geq \lambda_p(A)$ は A の固有根である.

関数 $\phi(x_1, \dots, x_n)$ は各 x_j について単調増加関数であるとする.

Lemma 2. 確率行列 A は非心 Wishart 分布 $W_p(n, \Sigma; \Omega)$ に従い, $\text{rank}(\Omega) \leq k = p - n$ とする.

$g_1 \geq \dots \geq g_p$ を $A\Sigma^{-1}$ の固有根とするとき,

$$(2.2) \quad P(\phi(g_1, \dots, g_p) \leq x) \leq P(\phi(t_1, \dots, t_p) \leq x) \\ \leq P(\phi(g_{k+1}, \dots, g_p) \leq x)$$

おまび, とくべつな場合として,

$$(2.3) \quad P(g_j \leq x) \leq P(t_j \leq x) \leq P(g_{k+j} \leq x), \quad j=1, \dots, p$$

が成立する. ここに, $t_1 \geq \dots \geq t_p$ は U の固有根で, U は $W_p(n, I_k)$ に従う.

[証明] $g_1 \geq \dots \geq g_p$ の分布を扱うとき, $\Sigma = I_p$, $\Omega = \Delta = \text{diag}(\delta_1, \dots, \delta_p, 0, \dots, 0)$ としてよい. $\delta_1 \geq \dots \geq \delta_p$ は $\Omega\Sigma^{-1}$ の nonzero roots. $H = [0, I_p]$, $U = HAH'$ として, Lemma 1 を用いると (2.2) をうる.

Lemma 3. p 次の対称行列 A , p 次の正定値行列 B , $HH' = I_p$ なる任意の $A \times p$ 行列 H に対して,

$$(2.4) \quad \lambda_j(AB^{-1}) \geq \lambda_j(HAH'(HBH')^{-1}) \geq \lambda_{k+j}(AB^{-1}), \\ j=1, \dots, p$$

が成立する.

[証明] $D = \text{diag}\{\lambda_1(AB^{-1}), \dots, \lambda_p(AB^{-1})\}$ とおく. このとき, $A = RDR'$, $B = RR'$ なる正則行列 R が存在

し,

$$\lambda_j(\text{HAH}'(\text{HBH}')^{-1}) = \lambda_j((\text{HBH}')^{-\frac{1}{2}}\text{HAH}'(\text{HBH}')^{-\frac{1}{2}}) = \lambda_j(\text{MDM}'),$$

$j=1, \dots, \rho$

と表わせる。こゝに、 $M = (\text{HRR}'\text{H}')^{-\frac{1}{2}}\text{HR}$ 、 $\text{MM}' = \text{I}_\rho$ であることに注意して、Lemma 1 を用いると (2.4) をうる。

この Lemma より、MANOVA case における固有根、および、正準相関係数の分布に対する次の Bounds をうる。

Lemma 4. 確率行列 A, B は互に独立で、それぞれ、Wishart 分布 $W_p(p, \Sigma; \Omega)$ 、 $W_p(n, \Sigma)$ に従い、 $\text{rank}(\Omega) \leq r = p-1$ とする。 $d_1 \geq \dots \geq d_p$ を AB^{-1} の固有根とするとき、

$$(2.5) \quad P(\phi(d_1, \dots, d_\rho) \leq x) \leq P(\phi(l_1, \dots, l_\rho) \leq x) \\ \leq P(\phi(d_{r+1}, \dots, d_p) \leq x)$$

および、とくべつな場合として、

$$(2.6) \quad P(d_j \leq x) \leq P(l_j \leq x) \leq P(d_{r+j} \leq x), \quad j=1, \dots, \rho$$

が成立する。こゝに、 $l_1 \geq \dots \geq l_\rho$ は UV^{-1} の固有根で、

U, V は互に独立で、それぞれ、 $W_\rho(p, \text{I}_\rho)$ 、 $W_\rho(n, \text{I}_\rho)$

に従う。

確率行列 S は Wishart 分布 $W_{p+g}(n, \Sigma)$ に従い、 S 、 Σ を

$$S = \begin{pmatrix} S_{11} & S_{12} \\ S_{21} & S_{22} \end{pmatrix}_{\substack{p \\ g}}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \Sigma_{11} & \Sigma_{12} \\ \Sigma_{21} & \Sigma_{22} \end{pmatrix}_{\substack{p \\ g}} \quad (p \leq g)$$

と分割する。

Lemma 5. $r_1^2 \geq \dots \geq r_p^2$, $\rho_1^2 \geq \dots \geq \rho_p^2$ をそれぞれ、標本・母集団正準相関係数の 2 乗、i.e., $S_{12} S_{22}^{-1} S_{21} S_{11}^{-1}$, $\Sigma_{12} \Sigma_{22}^{-1} \Sigma_{21} \Sigma_{11}^{-1}$ の固有根とする。 $\rho_{p+1} = \dots = \rho_p = 0$ のとき、

$$(2.7) \quad P(\phi(r_1^2, \dots, r_p^2) \leq x) \leq P(\phi(\rho_1^2, \dots, \rho_p^2) \leq x) \\ \leq P(\phi(r_{p+1}^2, \dots, r_p^2) \leq x)$$

および、とくべつな場合として、

$$(2.8) \quad P(r_j^2 \leq x) \leq P(\rho_j^2 \leq x) \leq P(r_{p+j}^2 \leq x), \quad j=1, \dots, p$$

が成立する。ここに、 $\lambda = p - g$, $\rho_1^2 \geq \dots \geq \rho_p^2$ は $U(U+W)^{-1}$ の固有根で、 U, W は互に独立で、それぞれ、Wishart 分布 $W_p(g, I_p)$, $W_p(n-g, I_p)$ に従う。

[証明] 確率行列 A, B は $Y: p \times n$ が与えられたとき、互に独立で、 $W_p(g, I_p; \Omega)$, $W_p(n-g, I_p)$ に従うとす

る. ここに, $\Omega = P Y Y' P'$, $P = \text{diag} (\rho_1 / \sqrt{1 - \rho_1^2}, \dots, \rho_k / \sqrt{1 - \rho_k^2}, 0, \dots, 0)$, Y の各要素は互に独立で $N(0, 1)$ に従う.

Constantine [2] より, $\gamma_1^2 \geq \dots \geq \gamma_p^2$ は $A(A+B)^{-1}$ の固有根の
と考えるとよい. $H = [0, I_p]$, $U = H A H'$, $W = H B H'$ と
おき, Lemma 3 を用いると (2.8) をうる.

§3. 応用. (2.2), (2.5), (2.7) より, ある種の検定統計
量の仮説のもとでの分布に対する Lower Bounds が求まる.
これらの検定統計量の分布は分っていないが, Bounding
Distributions はいろいろ調べられている. Bounding Distribution
から定まる棄却率を用いてテストを行うと, そのテストは
Conservative になっている.

(i) Tintner's model. 確率行列 X : $p \times n$ の各列は互に
独立で, $N(\cdot, \Sigma)$ (Σ は 既知とする) に従い, $E[X] = \mu$
とする. 仮説検定問題 H_1 : $\text{rank}(\mu) = k$, K_1 ; $\text{rank}(\mu)$
 $> k$ に対して, Tintner [6] は検定統計量, $T = g_{k+1} + \dots + g_p$
を提案している. ここに, $g_1 \geq \dots \geq g_p$ は $XX' \Sigma^{-1}$ の固有
根である. 実際, $\eta \geq c$ のとき, H_1 を棄てるという検
定方式は LR 方式である. このことは, 例えば, Fujikoshi
[3] における Lemma 1 から分る. Lemma 2 より,

仮説 H_2 のもとで,

$$(3.1) \quad P(T \geq c) \leq P(\lambda U \geq c)$$

をうる. ここに, U は $W_p(n, I_p)$ に従う. 従って, λU は $\chi^2_{[np]}$ である. c_α を $P(\lambda U \geq c_\alpha) = \alpha$ となるように定めると, $P(T \geq c_\alpha) \leq \alpha$ となる.

(ii) MANOVA モデルにおける次元に関する検定. 線型仮説問題に対する標準型は次のように表わせる. 確率行列,

$X_1; p \times p$, $X_2; p \times n$ の各列は互に独立で, $N_p[\cdot, \Sigma]$ に従い, $E[X_1] = \mu$, $E[X_2] = 0$ とする. このとき, " $\mu = 0$ " をテストする. ここでは, 仮説検定問題 $H_2; \text{rank}(\mu) = k$,

$K_2; \text{rank}(\mu) > k$ を考える. このテストに対し次の3つの統計量が提案されている. (1) LR 統計量, $T_1 = \log \prod_{j=1}^p (1 + d_{k+j})$

, (2) Hotelling's T_0^2 type 統計量, $T_2 = \sum_{j=1}^p d_{k+j}$, (3) Pillai's V type 統計量, $T_3 = \sum_{j=1}^p d_{k+j} / (1 + d_{k+j})$. ここに,

$d_1 \geq \dots \geq d_p$ は AB^{-1} の固有根で, $A = X_1 X_1'$, $B = X_2 X_2'$ は互に独立で, それぞれ, $W_p(p, \Sigma; \mu \mu')$, $W_p(n, \Sigma)$ に従う. Lemma 4 より, 仮説 H_2 のもとで,

$$(3.2) \quad P(T_i \geq c) \leq P(-\log(|V|/|V+U|) \geq c)$$

$$P(\tau_2 \geq c) \leq P(\text{tr } UV^{-1} \geq c),$$

$$P(\tau_3 \geq c) \leq P(\text{tr } U(U+V)^{-1} \geq c)$$

えうる。ここに、 U, V は互に独立で、それぞれ、 $W_p(p, I_p)$, $W_p(n, I_p)$ に従う。 τ_1 に対する Bound は Saw [5] により求められた。(3.2) における Bounding Distributions は多くの研究者により調べられている(その文献に対しては、e.g., Johnson and Kotz [4] と参照されたし)。

(iii) 正準相関係数に関する検定。 Lemma 5 で用いた記号

をつかう。仮説検定問題 $H_3: \rho_{k+1} = \dots = \rho_p$, $K_3: \text{not } H_3$ に対して、MANOVA の場合と同様な次の3つの統計量を考える。

(1) LR 統計量, $\theta_1 = -\log \prod_{j=1}^p (1 - r_{k+j}^2)$, (2) Hotelling's T^2 type 統計量, $\theta_2 = \sum_{j=1}^p r_{k+j}^2 / (1 - r_{k+j}^2)$, (3) Pillai's V type 統計量 $\theta_3 = \sum_{j=1}^p r_j^2$. Lemma 5 により、仮説 H_3 のもとで、

$$P(\theta_1 \geq c) \leq P(-\log(|W|/|U+W|) \geq c),$$

$$(3.3) \quad P(\theta_2 \geq c) \leq P(\text{tr } UW^{-1} \geq c),$$

$$P(\theta_3 \geq c) \leq P(\text{tr } U(U+W)^{-1} \geq c)$$

えうる。(3.3) の Bounding Distributions は (3.2) の Bounding

Distributions において, n を $n-f$ とおくことにより求められる。

References

- [1] Bellman, R.(1960). Introduction to Matrix Analysis. McGraw-Hill, New York.
- [2] Constantine, A. G.(1963). Some non-central distribution problems in multivariate analysis. Ann. Math. Statist. 34 1270-1285.
- [3] Fujikoshi, Y.(1974). The likelihood ratio tests for the dimensionality of regression coefficients. J. Multivariate Anal. 4 327-340.
- [4] Johnson, N. L. and Kotz, S.(1972). Distribution in Statistics: Continuous Multivariate Distributions. Wiley, New York.
- [5] Saw, J. G.(1974). A lower bound for the distribution of a partial product of latent roots. Comm. Statist. 3 665-669.
- [6] Tintner, G.(1945). A note on rank, multicollinearity, and multiple regression. Ann. Statist. Math. 16 304-308.